

地域住民も参加して行われた狼川の調査(7月22日、草津市南笠東3丁目)



草津市南部の丘陵地を源流に、琵琶湖へと流れ狼川。東海道新幹線や国道1号と交差する延長5・6キロの川沿いでは、上流に工場が集まり、下流には住宅地や商業施設が立ち並ぶ。年4回、6カ所で続けてきた水質と生き物の調査活動は6年目にに入った。

「時には『こんな生き物がいるのか』という発見がある」。事務局担当の近藤行和さん(56)が

同友会が生物多様性の保全に関する宣言をまとめ、地域活動に力を入れる方針を打ち出したのをきっかけに、11社で結成した。現在は12社が参加。業種により繁忙期が違うため、複数の企業で負担を分け合い、継続につなげている。企業と県、市

にこやかに話す。多様な生き物が暮らす場として川を見つめ直している。

活動日は、作業が一段落する午後3～4時ごろ、下校中の小学生が作業を見に来ることがある。「何してるんかな、

という感じ。川に興味を持つきっかけになれば」。協力している市環境課長の仲川喜之さん(53)は、住民と川との距離を縮める役割にも期待する。

湖南企業いきもの応援団(草津市)

一緒にやろうよ

の担当者が日程を調整し、平日午後の業務時間を使って活動する。

これまでの調査で、下流ではオオクチバス、ブルーギルが生息しているものの、上流への拡大はないことを確認した。た

だ、中流では県指定外来種のフロリダマミズヨコエビが見つかるなどの変化も出ているという。

活動日は、作業が一段落する午後3～4時ごろ、下校中の小学生が作業を見に来ることがある。「何してるんかな、

という感じ。川に興味を持つきっかけになれば」。協力している市環境課長の仲川喜之さん(53)は、住民と川との距離を縮める役割にも期待する。

川の水質と生息域調査

湖南企業いきもの応援団
2010年発足。草津市の狼川周辺で事業所を置く金融、倉庫、観光開発、空調機器製造など
の企業12社が参加する。
14年には県と滋賀経済同友会が創設した「しが生物多様性大賞」を受賞した。

(沢田亮英)

今年7月には、南笠東小の地域公開講座に初めて参加し、地域住民と一緒に調査に汗を流した。月下旬には、南笠東市民センターの催しにブース出展する予定もある。副団長の鳥羽茂之さん(57)は「今年になって地域との関係が広がってきた。地味ではあるが、継続することで地域に貢献したい」と話す。